

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 30 年 10 月 31 日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科 仏教学専修

職 名・学 年 博士後期課程・1年

氏 名 中山 慧輝

助成の種類	平成 30 年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	The 10th International Indology Graduate Research Symposium (第10回国際インド学大学院生シンポジウム)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	The Criticism of Theism in the Śrāvakabhūmi of the Yogācārabhūmi		
開催場所	School of Oriental African Studies (SOAS) University of London		
渡航期間	平成 30 年 9 月 25 日 ～ 平成 30 年 10 月 1 日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	移動費(航空費、その他国内外移動費)	150,000円
		宿泊費及び滞在経費	75,000円
		学会参加費	50,000円
発表資料作成費		25,000円	
当財団の助成について	今回、飛行機予約の都合により、日程の変更をしたが、そのような変更の際に申請が必要ない点がとても助かった。このように融通が利き、出発前も安心して渡航できたのは当財団の良さだと思う。		

成果の概要

京都大学大学院 文学研究科 仏教学専修

博士後期課程 1年 中山慧輝

(1) 研究集会の概要

研究集会名: The 10th International Indology Graduate Research Symposium

(第10回インド学大学院生シンポジウム)

開催場所: SOAS (School of Oriental and African Studies) University of London

開催期間: 2018年9月28, 29日

International Indology Graduate Research Symposium は、インド学に関係するすべての大学院生及び若手研究者に発表の機会を与え、自身の研究成果を国際学会で発表する機会の少ない若い世代の研究者たちが互いに切磋琢磨できる場を提供し、有望な次世代を育成する目的で発足した。会期は2日間にわたって行われ、開催国であるイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国だけでなく、インド、韓国、台湾などのアジアからも参加が多く、総勢22名による発表で議論が終始白熱していた。各発表者には質疑応答を含む30分の時間が与えられた。今回は、本シンポジウムの10周年記念ということもあり、Hatha Yogaの専門家であるJames Mallinson博士によるKey noteが行われ、盛り上がりを見せた。

(2) 研究発表の概要

発表題目: The Criticism of Theism in the *Śrāvakabhūmi* of the *Yogācārabhūmi*

(『瑜伽師地論』「声聞地」における有神論批判)

世界は何によって創造されるのか。この問いに対して、インドでは古来より多くの議論がなされてきた。特に、インドの有神論者たちは、自在神 (īśvara) やブラフマン (brahman) が世界の絶対者、創造者であると説く。一方、仏教はこの考えを批判する。本発表では、インド大乘仏教の二大学派のひとつである瑜伽行(ヨーガの実践)派の根本典籍である『瑜伽師地論』(*Yogācārabhūmi*)の中でも最古層に位置する「声聞地」(*Śrāvakabhūmi*)に着目し、声聞乗、いわゆる小乗の教えに基づいて修行者が涅槃に到達するために歩む修行道の中で説かれる有神論批判の解明を目指した。仏教は、世界を創造し、操り動かす神が存在しないことを論理によって証明するが、そのような傾向はより後代において顕著に現れ、特に仏教外の諸哲学派たちとの間の論争によって展開されていた。一方で、それらの文献より古い「声聞地」においては、そのような論理思考が瞑想のなかで適用されることを指摘し、他学派との論争ではなく、仏教修行それ自体において有神論批判がどのように行われているのかに着目して、仏教徒による有神論批判の新たな視点を提示した。

(3) 参加の成果

驚くことに、本学会において、インドの有神論を扱った発表が、報告者を除いて2つもあり、彼ら2人をはじめとして多くの助言や示唆を受けることができた。特に、仏教文献ではない他のインド学での有神論に関する海外の研究を知ることができ、大変有益なものとなった。質疑応答においても、瑜伽行派が瞑想において有神論批判を取り入れたのも、その前段階には後代と同様の論争が背景にあったのではないのか、などの発表の核心を突く鋭い質問も受け、再考のいい機会となった。海外での発表という点では、新たな環境での挑戦だったが、この経験を通して、他の国際学会にも発表者として積極的に参加する意欲が生まれた。

発表者以外の発表でも、多分野にわたる若手研究者の最新の研究を知ることができ、非常に刺激になった。インド学については、日本の研究も多く蓄積されているため、それらを他の研究者に共有することもでき、互いに情報共有を図ることができた。本シンポジウムでは、研究者交流のため、Tea breakが多く設けられており、その間に交流を深めることもできた。何よりも、自分と同じ年代の研究者が一度に集結し、学術的でありながらも、柔らかい雰囲気のもと研究集会に参加できたのは本シンポジウムのひとつの良さだと感じた。

また、日本のインド学の学会では、文献学に基づく丁寧な議論を基調としているため、基本的にパワーポイントなどを用いず、発表資料を配る形での発表が一般的だが、今回はほとんどの発表者がスクリーンを使っており、発表の手順や資料の作り方など、今後の国際学会等での参考になった。

今回の発表の成果については、来年刊行予定の学会誌 *Puṣpikā: Tracing Ancient India Through Tradition* に投稿する予定である。

謝辞

今回は、報告者にとって初めての海外での研究集会であり、貴財団のご支援が、その一歩を踏み出す後押しをしてくださいました。末筆ながら、本研究集会に参加するにあたり、ご支援いただいた京都大学教育研究振興財団の皆様にご心より感謝申し上げます。今後もこのような助成事業によって、ますます多くの若手研究者が海外へ歩を進め活躍する機会を得られることを心より願います。